意訳　北海砂金採取案内問答全

へるふね　Perupnei

目次

意訳　北海砂金採取案内問答全

北海砂金採取案内問答全　明治３３年２月２３日発行
発行所東京至臨館　発行者浅井金蔵

緒言

枝幸における砂金の状況は、新聞雑誌が報じる様に、盛況なのは知られているが、鉱区の状況や生活、器具の説明や使用方法等は、僅かにその一端を見るに過ぎない。たまたま学者として有名な朝倉先生の出京を聞き、旅宿に先生を訪ね、枝幸の実況、砂金の事業を懇切丁寧に教えて頂いた。これを公にし、同好諸氏の道標を得られれば至極の幸せである。編集者浅井金蔵

質問　浅井金蔵　応答　朝倉アツム

問１　枝幸とはどの様なところか

答え　枝幸は北海道北見国の北端に位し、函館から海上４３０マイル、小樽から２１０マイルの地にある。もっぱら鰊、鮭、鱒等の漁場で、戸数６百戸、人口３千余、警察署、郵便局、税務署、病院、学校、役場等がある。その他寺院もあって、飲食店が多数ある。この地は最近発展を遂げる北海道公望の地である。

問２　枝幸砂金発見の由来如何

答え　枝幸は海産物の収穫６～７万石に及ぶ全道に冠たる漁場であるが、明治３０年以降不漁となり困窮が相次いだ。特に一昨年は漁業皆無で、止むなく猟師に転じた漁民が山中に入り、たまたま砂金を発見したのである。元来北海道には多量の砂金があり、明治２６年以降盛んに掘られている。

問３　枝幸に至る航路及び旅費如何

答え　まず、日本郵船神戸発小樽行の汽船に乗り、小樽から枝幸に向かう社外船 (行程２日、運賃３円８０銭) に乗り換える。

陸路を行く場合、まず青森に行き、定期船（運賃９０銭）で函館に渡り、函館から小樽行に乗り換える（行程１８時間、運賃２円５０銭)。小樽行の乗船地は、四国、九州、広島、大阪、京都地方は神戸から（行程８日半、運賃９円)、東京は横浜から（行程５日半、運賃６円)、仙台、青森地方は萩の浜から（行程３日半、運賃４円５０銭）である。

問４　社外船は何日毎に出発するのか。船舶の大小如何

答え　小樽枝幸間は週１回、船舶は６～７百トンである。

問５　小樽枝幸間の航路開始は何時か
答え　冬期は結氷のため航海なく、開始は３月中旬頃である。

問６　中途地で宿泊滞在等の手数如何
答え　各寄港地に４～５時間停泊することがあるが、その他は小樽まで上陸滞在はない。小樽で枝幸便に乗るため滞在するが、今年は臨時出航が不明なため、長期滞在の恐れがある。北見砂金採取社は各汽船と特約があるので、小樽に３日以上滞在することはない。

問７　枝幸の物価、宿泊料その他は如何
答え　枝幸に限らず、北海道の宿泊料は、並９５銭、中１円１５銭、上１円５０銭で、町はずれの木賃宿は３０銭程である。物価は内地と大差が無い。
　編集者曰く　北海道北見砂金採取社の採取人募集に応じた者は、僅か２円の加入料により、郵船会社は１割５分、社外船は３割５分の割引がある。なお、神戸、横浜、萩の浜、函館、小樽、枝幸等、各地に特約旅館があり、宿泊料が半額以下となる。その他鉱区案内、入山料割引等がある。詳細を希望する者は切手２銭を添え、同社へ申し込まれたい。

問８　砂金産出は枝幸に限るか、また、未だ多量を産するか
答え　北海道の河川は砂金を産するところが多い。後志の利別川、渡島の上磯川、知内川、日高のホロベツ川、シビチャリ川、新冠川、三石川、元浦川、沙流川、石狩の石狩川、十勝の日方川、釧路の釧路川である。
　今、枝幸が盛況なのは、多量の砂金、金塊を容易に採取できるところであるが、ここの砂金の源泉は、北見天塩境界のポロヌプリ山と思われ、ここは、未だ人跡の及ばない所が多く、必ずや多くの宝庫を埋蔵するものである。
　また、昨年の採取は非常に幼稚未熟なもので、綿密の採取をしたとは言い難い。ただ土地を荒らしただけで、１０中８～９は残留している。出水により、堀り荒らした砂礫は復旧し、存在する砂金は皆地盤に沈殿する。前途は益々有望で、３～５万の採取者が集まっても尽きることがなく、ほとんど無尽蔵である。

問９　砂金採取のため渡航者が多いが、他に賃金を得る道があるか
答え　北海道は砂金採取に限らず、鉄道敷設工事、第七師団建設工事、小樽築港、網走築港、釧路港埋立工事、枕木の切り出し、マッチの製軸、漁業、その他の事業は数えるに余りある。しかし、一攫千金の砂金採取のために、他の業務に従事する者は少なく、その賃金は従来の数倍になっている。

問１０　枝幸から鉱区に至る経路、その他有望な鉱区があるか
答え　枝幸から川を遡り２里程で鉱区に達する。途中岩層を穿ち樹木や熊笹の間をたど

る事があるが、難所は２～３で北海道の山としては驚く程ではない。鉱区は、パンケナイ川、ウソタン川、ペーチャン川、幌別川支流、ポンパンケナイ、ケトベツ、ペーチャン、チタクシュベツ等いずれも良好である。

問１１　採取に必要な諸器具如何
答え　主要物と賛助物の２種がある。主要物とは採取器でカッチャ、ネコ、エビザル、ユリ板等であり、賛助物はバケツ、鋸、ナタ、鍋、椀、着物、毛布、足袋、草履、油紙、綱、袋、手拭、紙、マッチ等である。しかし、これらは必ず必要なものではなく、各自用途によって携帯する。重量は７～１０貫を適当とするが、私は数年来軽装を旨とし、寝具としては外套、毛布のみ、その他は鍋、小刀、釣針等を携え、ツル、カッチャを腰に挟み、米、味噌を背負い、飯を炊き、汁を啜り、蕗を摘み、川で魚を採って、深山に起臥し採取探検に従事する。

問１２　賛助物使用の場合を問う。
答え　バケツは水を汲み、湯を沸かし、鋸、ナタは樹木を切り、小屋を作り、薪を得るものであり、採取に直接の道具ではない。

問１３　雨露を簡便に凌ぐ方法があるか
答え　熊笹を四方から丸く束ね、蒲鉾小屋の様に作るが、堅硬な油紙を三角形に張ってテントの代用にする。その他傘程の蕗があるので十分雨露を凌ぐことができる。また、私が野宿するときは、砂地の上に葉を重ね、毛布を敷いて寝るのだが、ひとつも苦痛を感じない。寒さを感じる時は枯れ木を集めて暖を取る。数年来この方法により深山渓谷を跋渉するが、昼間の疲労のため夜間は熟睡できる。

問１４　焚火をするのに時間を要するか、また雨天の際は如何
答え　山林には燃えやすい樺の皮があり、焚火は実に簡単で、全く時間を要さない。また、雨天でも良く燃える。

問１５　ネコ、カッチャ、ツル、エビザル、ユリ板とは何か。
答え　ネコとは、筵で長さ３尺、幅１尺２寸、重さ１貫５百匁のもので、河床に敷き、流水によって砂礫を分離して、砂金を残留させる道具である。カッチャとは長さ５～７寸、幅３～４寸、重さ３～４百目、鋭利な鍬の一種で地盤に堆積する砂礫を掬い砂金採取に使用する。ツルとは、鳶口の類で長さ７～８寸、重さ２～３百目位の鉄製で、砂金を包含する地盤を破砕し、テコに代用する等採掘に用いる。エビザルとは土砂篩の類であり、当該地で使用するものは熊笹で編んだものである。ユリ板とは長さ２尺２～３寸、幅１尺

１～２寸、重さ５～６百目、形状は箕の様なもので、水中で砂金を選別する道具である。

問１６　採取器具はどこで求めるのか。
答え　採取器具は製造販売所が無く、各自自分で製造するもので、枝幸でも製造販売する者があるが、高価で完全なものはない。採取器中エビザル等は現地で自作するが、その他は各自携帯を心がけるべきである。現在、様々な器械を考案する者があり、私も考案中であるが、他者と比べて良好であれば公開するかもしれない。

問１７　砂金採取の方法如何
答え　砂金の採取方法に決まりはないが、概して流し堀り、岡堀りの２種である。流し堀りとは、川の水流を一定の箇所に導き、水流を利用して採掘するもので、岡堀りとは、河岸や山澤の土砂を採掘し、水中で選別するものである。これらに使用する器具は簡単なもので婦女子でもなし得る。新聞では、樹木を倒し、岩層を崩す等と書かれているが、その様なことは非常に稀で、ほとんど労力を要することはない。

問１８　砂金採取者の収穫成績如何
答え　砂金採取というものは、熟練によって差異があるが、運にもよる。そしていかに未熟不運でも、終日作業すれば平均４～５分を下る事はない。このため、熟練者では１～２匁を得る事は簡単であり、２～３０匁、６～７０匁の大塊を得る者もいる。昨年は１人の収穫高が１日平均５～６分以上になり、１００人中２５人は生涯見る事ができない程の大金を得、５０人は日雇い労働者の数倍の金員を得、残る２５人は悲境に陥った。これらは砂金が得られなかったのではなく、得た収益を賭博、酒食に費やした結果であり、全く自業自得と言うべきである。　昨年、枝幸の収穫は凡そ１６０貫目（代価６５万円）であり、日本全国産金額のほぼ半分を占めている。

問１９　鉱区入山料は如何
答え　鉱区の良否により差があるが、１カ月１人につき砂金５～６分（代金２円）から３匁（代金１２円）を、２回に分けて納付することとなっている。

問２０　鉱区入山の時期如何
答え　採取の時期は５月１日から９月３０日迄で、内地から来るのであれば４月上旬～中旬に出発するのが良い。

問２１　風土病の有無如何

答え　風土病は特に無い。時々脚気があるが、これは採取の際、長く膝下を水中に付けるため発症するもので、少し静養すれば治る。

問２２　熊の来襲如何
答え　深山幽谷のため熊は生息している。襲われることが無いとは言えないが、ほとんど聞いたことがない。私も熊の足跡を見たことがあるが、明治２７年以来山野で熊を目撃したことはない。

問２３　鉱区には無頼漢が脆弱者を圧倒すると聞くがどうか。その他盗難の如きは如何。
答え　広い鉱区には多数の者が集合し、治安を守る警察が足りず、憂慮するのは理解できる。しかし、食に飽きた猫は鼠を取らずの例えどおり、容易な労働で多大な収益があるのに、何で一時の欲を満たすため、永遠の収益を失うことをするだろうか。採取者の中には、賭博酒食で失敗し、他と争うこともあるが、彼らは同僚間でのみ争い、他の者の関せざるところである。その他横奪は懸念に及ばないが、盗難は自ら注意するしかない。

問２４　微細な砂金も採取する方法があるか。
答え　大小があれば、大を先に得ようとするのが一般的である。微細な砂金を得る方法も無い訳ではないが、大を得るのが簡単なのに、小を求めるのは愚かなことである。強いて言えば機械力を使うべきであるが、これは机上論で到底現実的ではない。但し、これから４～５年もすれば微細なものも採取する様になるかもしれない。

問２５　採取人の服装及び温度如何
答え　鉱区は鬱蒼とし、昼なお暗いところが多いが、朝７時から夕方４時は日が当たり、決して寒気がある訳ではない。気温は３月頃から４月頃迄は－３～７℃、４月中旬以降、降雪収まる頃は１０～１５℃、５月下旬以降は１５～２５℃になる。元来北海道は、冬期は予想外に寒く、夏期は予想外に温暖である。服装は筒袖で、又引き、脚絆をはき、シャツ２～３枚を重ね、草履、足袋等を用意すれば足りる。

問２６　砂金を含有する地質は色合いが異なるというがどうか。
答え　経験豊富な者以外で、砂礫を見て砂金の存在を判断するのは困難である。しかし岩石の底、川流を阻害する箇所で、やや黒色を帯びる粘土がある場合、その中に多量の砂金が存する事があり、採取者はこれらを探見採掘する。

問２７　砂金の母岩及びその産出の原因如何。

答え　地球全体を構成する岩層を大別すると、水成岩と火成岩に分かれる。水成岩中には石炭、化石等が含まれ、火成岩中には金、銀、銅、鉄等の金属がある。枝幸砂金地が砂金を産するのは、ポロヌプリ山が、珪質的火成岩、即ち黄金の母岩から成る山層であり、黄金が天然の淘汰によって分解され、川流によって運搬され、川床の地盤に沈殿するからである。そして、鉱物は一定の方向に従って結晶する性質があり、地球構成の日から今日に至る永世の星霜を経由して、今日の砂金又は金塊となったのである。

問２８　砂金鉱区を正式に出願する手続如何

答え　鉱区を出願して正式に砂金を採取する者は、砂鉱採取法に基づき、河床では５里、山林では６０万坪を１鉱区として、収入印紙１０円を貼付して、所轄鉱山監督署長を経由して農商務大臣の許可を受けなければならない。

意訳　北海砂金採取案内問答全

著　　へるふね

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社